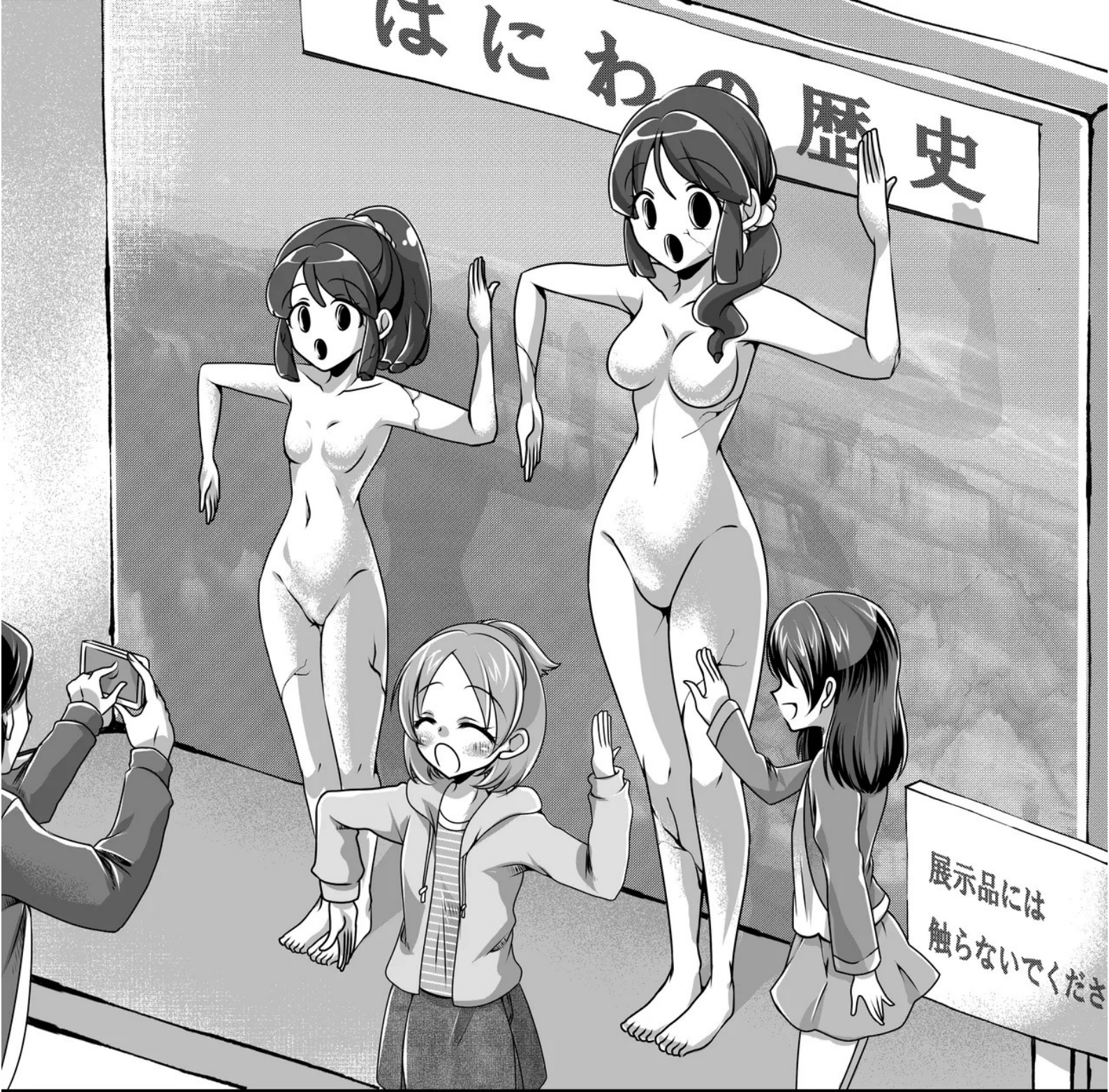


GAME















とある親子の変化物語

作 M I 様

イラスト のゆき様

【登場人物】

茅ヶ崎 玲子 (ちがさき れいこ)

茅ヶ崎 千尋 (ちがさき ちひろ)

加害者…愛理 (えり)

【プロローグ】

久しぶりのお出かけということもあって、芽ヶ崎 千尋はやけにうきうきと、そして速足で歩いていていた。

それくらいに待ち遠しかったのかもしれない、今までそれを口にできなかったのを偉いと思う反面、そうさせてしまっていた母の芽ヶ崎 玲子は複雑な心境であった。

今日くらいは千尋の好きな物を見て、好きなことをさせて、そして好きな物を食べさせようと、心に決めていた。

「あ、ひろちゃん」

やや先にいた千尋に声をかけたのは、同じくらいの〇〇であった、千尋をひろちゃんと呼ぶあたり、よほど親しいのかもしれない、だが今までこんな子を見たことが無いし、千尋から聞いたこともなかった。

「ねえねえ、一緒に行こうよ」

「え、うん…」

やや強引というか我儘というか、そんな印象の〇〇であった、ただそれでいて非常に魅力的というか、人を惹きつけるような何かがあった。

そして同時に、近寄りたいたい危険な香りを併せ持つ気がした。

「ママさん、私は愛理です、ひろちゃんのお友達」

しっかりと深々頭を下げ、今まで抱いていたいろいろな物が杞憂だと気が付き、玲子はほっとしてしまう。

「ひろちゃん、愛理ちゃんとも一緒に行こうよ」

どこかよつと不満そうな千尋であったが、それと対照的に愛理はやけに大喜びであった。そうして愛理に連れられるようにして、二人はデパートを進んで行くのであった。



元気に走り回る姿を見て心配になる反面、とても仲がいいんだなあと玲子は感心する。たまたま出会った千尋のお友達ということだが、玲子はそのことを良くわからない、いつの時代も〇〇の世界は大人の知らないところで広がるようだ。

「ひろちゃん、こっちはこっち」

愛理の歩みに迷いはなく、目的地へ一直線のようにであった、それくらいに「パートのどこに何があるのかを把握しているのだなう。」

それを追いかけるのは大変だが、ようやく辿り着いたのがゲームコーナーだったので、玲子は二人がなんのゲームをやっていたのか、気になってしまった。

玲子だって子どもの頃に、メダルゲームくらいはしたことがある、こうやって親に連れられ、メダルが尽きるまで楽しんだものであった。

「ほら、これおススメだよ！」

愛理が得意げに語るのは、プリクラであった。

今のプリクラは、玲子がやったことのあるものよりもはるかに高性能になっているらしい、玲子も思わずわくわくしてしまふ。

だが、千尋の興味はどうやらそっちに行っていないらしい、千尋の目の先にはお菓子のゲームマシンがあった。

両方するだけのお金はあるけど、時間的には両方出来ない、玲子は困ってしまった。

② プリクラをやってみよう

③ お菓子を食べてみよう

①ブリクラをやる

「ひろちゃん、ブリクラやってみようよ」

玲子が千尋の手を引いてブリクラに入っていくのを、愛理は思わずくすくす笑ってしまった。なんて仲のいい家族なんだろう、素敵なことだと感じつつも、自分はブリクラの中へ入らない、それに玲子が不思議がって尋ねてくるので、こまかしてしまおう。

「ほら、お二人の記念に！」

そう言われれば、玲子もそれを意識してしまう、久しぶりの千尋とのお出かけなので、こうして家族の団欒も大事なことである、千尋の友達に気を使わせて、申し訳なく思っているようだ。二人は入るものの、いざやってみようとすると、どれをやったらいのかが分からない、そのため愛理は設定を覚えていた。

タッチパネルであれをこれとやっていけば、撮影まであと少しになっている。

「じゃあママさん、ひろちゃん、画面の指示に従ってね」

愛理はそうして引っ込んでいった、ブリクラの中は二人だけに。

「画面の通りにポーズをしてね！」

ブリクラの音声案内が響き、玲子は思わずくすくす笑ってしまう。

赤線に収まるようなポーズという事だが、そのポーズがずいぶんとへんてこで間抜けだからだ。右手を上、左手を下にして、口を開けて、ずいぶんと注文が多いものの、それが何を意味するのか、玲子は気がついてしまう。

「ママ、はさかしいよ」

千尋はあまりお気に召していないのだろう、恥ずかしがってどこかぎこちない、これがなんのポーズで、何を意味しているのかを、まだ分かっていないこともあるのだろう。

「ほらひろちゃん、ママみたいに、ほら！」

その一方で、玲子はやけに乗り気であった、自分のほうが楽しんでしまっているようだ。

画面は二人の特徴的なポーズと、設定どおりの背景があるばかり、やけに古風、というよりも古代的なものだ。

玲子と千尋が取っているのは、鎧輪のポーズであった、そういう設定なのだろう、そのポーズがちゃんとできれば、あとは撮影だけとなる。



「ねえママ、はにわってなに？」

「あとで教えてあげるからね、ひろちゃん」

ぽかんとした顔をしつつも、シャッターが切られ、撮影が終わったようだ。

それを愛理は大笑いしつつ、プリクラの中に入り、出来立てのプリクラを我先にと手にし、出来栄を確かめている。

「うん、二人とも、本物の壱輪みたい！」

プリクラに映っているのは、大小の壱輪の姿であった。

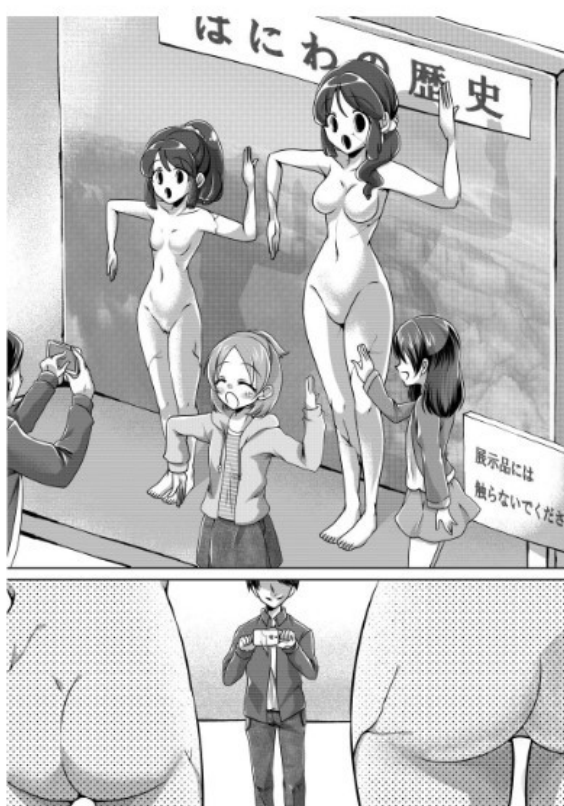
そして愛理が話しかけているのもまた、大小の壱輪であった。

ほんの瞬のことであった、プリクラの撮影がされた途端、二人は完全な壱輪となってしまったのである。

人間大で、まるでさっきまで生きていたかのようなリアルさのある、不思議な壱輪であった。

「壱輪ってね、今のあなたのことだよ、ひろちゃん」

愛理は笑顔で、千尋に良く似た顔の壱輪を振っていた。



最初に戻る

愛理は歴史博物館へとやってきた。

この町に奇贈された、歴史的な物の展示品がいくつもある、ここは愛理の親族が管理している。愛理はフリーパスで入れる、愛理の特権だろう。

特に最近のお気に入りは、出土品コーナーにある、埴輪であった。

まるで生きていたかのようなリアルティと、どうやって作ったのか気になるほどの完成度、そして思わず笑顔になってしまうほどの、ぼかんとした間抜けな顔だ。

目と口に穴が開いていて、右手が上を向き、左手が下を向いている、実に埴輪らしいといえは埴輪らしい。

だが人間大である、成人女性と〇〇〇の大きさだ、二体並べればよく似ていることもあり、二つは家族、母と娘ではないかと思われている。

今日は愛理以外にも、〇学校の社会化見学があり、〇〇たちが食い入るように見ていた。

「うわ、すごいねあれ」

「裸で素そ」

みな指をさし、笑ったり不思議そうにするばかり、中には同じポーズのまねをする〇〇たちも。

そうやってみんなに見られてもなお、二体の埴輪は表情もポーズも一切変えず、ただじつと立つばかりであった。

②お菓子を取ろう

千尋はお菓子を欲しがっているようなので、無理やりプリクラをやっても、いいプリクラは撮れそうにない。

なので玲子はそっと手を引き、お菓子を取るゲームの方へ。

「ねえママさん、プリクラやらないの？」

愛理は少々不機嫌そうになり、頬を膨らませてしまっている。玲子は困ってしまうが、千尋はそんなのお構いなしに、硬貨を握りしめてゲームへ向かっていた。

UFOキャッチャーの小さいアームでお菓子をすくいあげ、そして手元で落とせば、いくらかが手に入るという構造である、千尋は目を輝かせて早速挑戦するものの、お菓子はちよっとしか取れなかった。

そしてそれが手元の台で小さな山を作るばかり、千尋の元へは一個も来なかった。

「もうひろちゃんったら、私が取ってあげるよ！」

助け舟を出したのは愛理であった、千尋に代わってアームを操作すれば、結構な量のお菓子が取れている。

鯨、チョコ、ラムネ、どれもこれもたつぷりと台へと巨山を作り、そしてそれが崩れ去ってばとぽとと手元に落ちていく。

両手いっぱいのお菓手に、千尋はとっても嬉しそうだ。

「すごいね、愛理ちゃん」

玲子が褒めると、愛理はどこか得意げに笑みを浮かべている。さっきまで不機嫌だったのに、〇〇とは何て単純なんだらう。

千尋がうきうきと歩き出したので、玲子はその後ろをゆっくりとついていった、そして愛理も同じく、その後を追うのであった。

千尋はおもちゃコーナーにて立ち止まり、じっと棚の上の人形を見つめていた。女の子が遊びたくなるようなかわいらしい造形に、着せ替えのお洋服までついている、ただ少々値が張るものだ。

玲子はそれをしつかりと記憶していた、千尋が欲しいものらしいので、これを誕生日だったりクリスマスだったり、なにかしらで買ってあげれば、きっと大喜びだろう。

「ほらひろちゃん、あのお人形さんここにもあるよ」

千尋の手を引いて案内すれば、小さなテーブルとその上に置かれたおもちゃの数々が目に入る。千尋が欲しがっていた人形はちよこんと、おもちゃのお家の中で座っていた。

だが千尋はあまり興味を示さない、どうやら人形よりも気になったことがあるのだろう。やや恥ずかしそうにしつつも、千尋はつぶやいた。

「ママ、トイレ」

どうやらトイレに行きたいらしい、おもちゃコーナーからはそんな声もない、一人で行けるだろう。

「ひろちゃん、一人で行って来れるでしょ？」

受理はつまらなさそうに人形を眺めつつも、千尋へと答っていた。

玲子は悩む、一人で行けるようになつてほしいし、かといって一人で行かせるのも不安が多い。

①一人で行って来て

②ママも行ったかったの

① 1人で行って来て

玲子がそう言うと、千尋はやや速足でトイレへと行ってしまった。

そこまで限界が迫っていた、という風には見えなかった、きつと千尋も一人で行くのはまだちょっと怖かったのかもしれない、悪いことをしてしまった。

なので玲子も入口くらいまでは行こうと思っただが、その歩みを愛理に遮られてしまう。

「ねえママさん、ちょっといいかな？」

「なに、愛理ちゃん？」

ちよっとどいてほしいのだが、愛理はなんだかどいてくれない、ややむっとするものの、しかめっ面には愛理の人差し指が向けられていた。

「人形になって」

愛理はそう短く言った、玲子は何のことだか困ったし、人を指差すなんてと怒りもした、だがそんなことがどうでもよくなるように、体に異常が始める。

「え、えっ？」

なぜか急に背筋をびんとし、きれいに直立してしまったのだ、それがなぜなのか分からないが、その意識は急激に混濁しはじめる。

まるで景色が大きくなったかのように、周りがぐるぐるとして、玲子は困惑してしまう。

やがてぼとりと、自分の体が軽い落音を立てたのを最後に、意識は切れてしまった。

最後に聞いたのは、愛理の声だった。

「わあ、ママさんかわいい」

「あれ、ママ……」
トイレから帰ってきた千尋は、玲子の姿が見えないことに不安を感じてしまう。
変理のほうへと歩いてきて、ママのことを尋ねるが、変理の返事は意外なものだった。
「ああ、ママさんはこれだよ」
変理がそうっと手渡したのは、玲子にそっくりの人形であった。
玲子と同じ顔、同じ髪型、同じ服装、だがそれは小さくかわいらしい、人形である。
「ほら、ママさんと遊んであげなよ」
変理にそのかされ、千尋は不安をそっちのけにして人形遊びを始めてしまった。
「これいいこ！ おかたづけしなさい！」
千尋はおまじことをしていた、玲子人形を娘に、自分を母親に見立てた、普段の家の様子を、おまじことしているのだろう。
「ひろちゃん、助けてー！」
玲子人形を椅子に腰掛けさせ、食事の真似事もする、普段言われていることを、そのままそっくりやりかえしているかのようだ。



「れいこ、ピーマンもにんじんもたべなさい！」
「ひろちゃん、気が付いてー！」
「れいこ、はやくお風呂にはいりなさいー！」
「やめてひろちゃん、洋服を脱がさないでー！」
結構派手に遊ぶ様子を、変理は微笑ましく見ていた。
だが玲子人形をそこに置くと、千尋は少しぐずりだしてしまう、散々遊んでから、玲子の姿

が見えないことを思いだし、不安になってしまったのだろう。

愛理は面倒くさそうに、千尋にささやくのであった。

「ねえひろちゃん、あなたもママさんと同じお人形さんにならない？」

「えっ？」

「ママさんはこんなにかわいいお人形さんになって、ここで毎日誰かと遊んでもらうんだよ、羨ましいよねっ」

「な、何を言ってるの、この子……」

「ひろちゃんもお人形さんになれば、ママさんともずっと一緒に居られるし、毎日誰かに遊んでもらえるよ」

「すごいね！」

「駄目よ、ひろちゃん！」

「じゃあ決まりだね、ひろちゃんも人形にしてあげるよ！」

「わーい！」

愛理は千尋を、先ほど玲子にしたのと同じように、人形へと変えてしまった。

慌てふためく玲子と違い、終始人形になることを期待していた千尋であった、広がる気色も、自分の大きさにちよほどよくなるおもちゃのお家も、全てが〇い目には、魅力的に見えたのだろう。

やがて千尋もおもちゃのお家の中に投げ出され、適当に転がってしまっていた。

「よかったね、ひろちゃん、これで毎日誰かに遊んでもらえるよ」

愛理は人形二つをそのまま、おもちゃコーナーに置き去りにしてしまう、別に愛理の物ではないから、持ち帰る義理はないのだ。

「だれか、あそんで〜」

「うう、ひろちゃん……、ママどうしたら……」

人形二つはどちらにも、にこにこ笑顔であった。

[最初に戻る](#)

② ママも行ったかったの

「も、しょうがないな」

千尋はそう言いながらも、どこかちよつとほっとしたかのようである。

玲子は離れ際にそつと、愛理へと声をかけておいた。

「愛理ちゃん、ここで待ってね」

やや不安ではあるが、自分の子の千尋の方が優先するべき対象である、それに玲子は愛理に対し、なにかしらの不安があった。

千尋と別々の個室に入り、自分も用を足しつつも、隣の千尋へと尋ねてみる。

「ひろちゃん、愛理ちゃんとはどこで友達になったの？」

水洗の音で千尋の声は聞こえにくかったが、千尋は玲子の問いにはっきりとした返事をしていった。

「わかんない」

手を洗い、ジェットタオルで手を乾燥させる千尋を見つつも、玲子は愛理に対する不安がどんどん膨れ上がっていく。

本当に友達なのだろうか、それとも、いろいろなことを考えたが、案外千尋が愛理がとても社交的で、すぐその場で友達になったのかもしれない、とも考えられた。

「ひろちゃんにママさん、遅いよ」

にこにこする愛理に不安はあれども、何かしらの悪意なんかは感じられない、玲子の考え過ぎだろう。

玲子は千尋、愛理と共におもちゃコーナーを後にした。

次へ

ゲームで遊び、おもちゃを散々見て回ったこともあって、千尋はやや疲れているようだった。玲子はエスカレーターのとこにまでやってくると、千尋と愛理を椅子に腰掛けさせ、それぞれにジュースを買ってきてあげた。

千尋には大好きなイチゴオレ、愛理は何が好きなのか分からないので、とりあえずアップルジュースを買ってあげ、そして自分も缶コーヒーを買い、椅子に腰掛けほっと一息つくことに。

久しぶりのお出かけで、千尋もたいそう楽しんだことだろう、イチゴオレを飲む顔はとてもニコニコしていた。

そんな中、愛理がごそごそとポケットをまさぐり、何かを取り出し二人に見せ付ける。

「これ、さっきゲームで取ったやつ」

両手いっぱいのお金、ラムネがいくつも、まるで至石のようにきらめいている、ちやうど疲れてきたこともあって、ジュース以外に甘いものが欲しかった。

「ひろちゃんもあるよ、おかし」

千尋もポケットからお菓子をとり出し、得意げに玲子へと見せ付けていた、彼女なりの対抗意識なのだろう、だが数えるまでもなく、圧倒的に少ない。

「せつかくだから、お菓子食べようよ」

愛理はそう言いながら、餡王をじっと眺めていた。

① いただきます

② ひろちゃんのを貰おうかしら

① いたたこうかしら

玲子はそっと手を伸ばし、胎玉を一つ貰った。

続いて千尋も同じ胎玉を貰い、すでに封を破いて口へと放り込んでしまっている。

「しっかり齧めてね」

愛理はニコニコしながら、自分も胎玉を齧めだしていた。

玲子も封を破り、胎玉を口へと放り込んだ、赤い色だからりんご味だと思ったものの、その味は表現しがたいものであった。

「ん〜」

ちゅばちゅば、ちゅぶちゅぶ、口の中で胎玉を転がしながら、玲子は何の味なのかを当てようとし続ける、だが味はまったく言っていないほど分からなかった。

甘く、すっぱく、おいしい、だが何の味なのか分からない、不思議な味であった。

「…ふえっ…」

口の中の胎玉がずいぶん小さくなり、飲みかけのコーヒーを飲もうとした矢先のことである、缶を握る手に力が入らなかったのだ。

そして急に体が硬直し、そのまま身動きが取れなくなってしまう。

「ふっ、どんなのになるかな〜」

愛理だけがただ一人笑っていた、玲子も千尋も何なのか分からず目が泳ぐ、そして口内では小さくなった胎玉が転がっている。

体中に力が入らず、体はそのまま椅子へと沈みこみ始める、だがそれは椅子が凹んでいるのではなく、二人の体が薄っぺらになっていたからであった。

「なにこれっ…」

「ママ、ひろちゃんへんだよっ…」

二人はなんとか視線を合わせるものの、それで会話が出来るはずもなく、むしろ異常な姿となっていてお互いを見ても、恐怖は膨れ上がるのだった。

「あっ…」

やがて二人の意識は消えてしまった、二人の体は相当薄く、そして細長い布切れのようになっ

てしまったのである。

変に面影があるため、ずいぶんへんてこな模様であった。

それを愛理は、まるで出しすぎたトイレットペーパーを巻き戻すかのように、くるくると巻き取っていく、そうすれば二つの巻物が出来上がった。

「どんな柄になるかな〜」

愛理は二つをほとんど両端から叩くと、二つはぐにぐにと動き、みるみると色が変わっていった。

変な面影は一切ない、本物の反物になっていくのだろう。

小さいのは元千尋の反物だ、全体的に薄明るいピンク色のかわいらしい柄に、ところどころに大きなイチゴがいくつもあしらわれている、イチゴが好きなのころもはっきり出ているし、あきこちに散らばっているのも〇〇〇らしい無邪気さが出ているようだ。

そして大きい反物は元玲子、薄い黄色の全体には、ところどころに少し濃いハートマークが浮かび上がっている、玲子の優しさが色にもハートの形にもよく出ていた、手触りもまた母のぬく

もりを感じさせるものだ。

出来上がった二つの反物を持ち、受理はデパートから帰っていった。
飲みかけのイチゴオレや缶コーヒ―は、そのまま置き去りだった。

「ひろちゃんかわいいい、ちょうと着物の帯が欲しかったんだ」

小さなイチゴ柄の反物を広げ、受理はうきうきと頬を握っていた。

そしてあたり線を引き、ちよきちよきと何のためらいもなく切っていく、それが元は何なのかも知っているのに。

「ママさんはちよっと、使い道ないかな？」

大きなハートの反物は柄も手触りもよかったが、いかんせん使い道に困るものであった、いくらかわいいとはいえ、また着物を仕立てても置き場にも困る。

大きなハートの反物は、そのまま使い道もないため、他の反物と一緒に仕舞われてしまった。やがてイチゴ柄の帯が出来上がり、受理は着物に着替え、早速帯を締めていった。

まるで夏の夜空に打ち上げられた花火のような、紺に花火の模様を光らせる素敵に着物に、イチゴがいくつも映えるかわいらしい帯が合わせられて、姿見に映る全体像はともかわいらしい、受理も大満足であった。

「ひろちゃん、ママさんに見てもらおう、って、ママさん仕舞っちゃったんだ」
受理は一人、くすくす笑っていた。

[最初に戻る](#)



②ひろちゃんの賣おうかしら

「それは愛理ちゃんが取った物だから、賣っちゃうと悪いわね」

玲子はそう言いながら、千尋の手からラムネ菓子を一つ取り、口へと含んでしまう。

「帰って、親御さんに見せてあげれば？」

「え、じゃあもう自分で食べちゃおうと！」

愛理は少し不機嫌になりながら、取ったお菓子をどんどん口へと放り込んでしまう。

始が、ラムネが、ガリガリ、バリバリ音を立てて噛み砕かれてしまっている、ずいぶん落着きがないと玲子は思ってしまった。

なんだかずいぶん変わった子だなとは思っていたが、やはり何かが怪しい、玲子は何かしらの理由をつけて、愛理から千尋を離れさせようとしているのだろう。

千尋はそんな一人を不思議そうに見つつも、一足先にイチゴオレを飲み干したので、ゴミ箱へと捨てに行き、そしてそのまま思いついたかのように、どこかへと走って行ってしまった。

玲子はそのと立ち上がり、千尋の後を追っていた、愛理も同じく追いかけていくが、飲みかけのアップルジュースもお菓子のこみも、全て捨てずにそのままであった。

「ママ、これやりた〜い」

千尋がやってきたのはトイレ付近、いくつもガチャボンが並ぶところであった。

100円のものから300円のものまで多種多様、男の子も女の子も、大人も子どもも胸が躍るものがいくつもある。

千尋が欲しがっていたのは、アニメキャラクターのガチャボンであった、一回800円でちよっとお高いものの。

玲子は財布を取り出し中身を見るが、よりにもよって100円玉が一枚あるだけである。

両替の機械はゲームセンターまで行かないとありそうにない、これには困るばかりであった。そんな玲子に助け舟を出したのは愛理であった、かわいらしい財布を取り出し、中身を見てから話し出す。

「ママさん、両替してあげようか？」

まだ〇〇ながらに、両替の知識があるなんて、玲子は感心しつつも、怪しんでしまう。だが早く何かをしないと、千尋がぐずり出すかもしれない、板はさみであった。

① 両替してあげようか？

② 100円のを回してみよう

① 阿替してもらおうかしら

千円札を差し出し、十枚の百円玉を貰う、玲子はほっとして、千尋に百円玉を2枚手渡し、やらせてあげることにした。

ときどきする千尋が早速お金を入れて、ハンドルをぐるっと回せば、カブセルが一つ出てくる、クリアーな蓋越しに中身は丸見えだ。

玲子は何が出たのかはよく分からないが、千尋の顔を見ればそれが、欲しかったものではないのが伝わってきた。

「ママ、もういいかい」

「駄目よ、それでいいでしょ？」

財布を仕舞うと千尋はややくすり出す、それほどまでに締め切れなかったのだろう。

そんな千尋を見かねてか、愛理は自ら金を出し、同じガチャポンを回すのであった。

「いい、ひろちゃん？　こういうのはね、お願いするものだよ！」

愛理はさも手馴れているかのように、ガチャポンの機械の頭を撫でたりしている、懸賞を出すときにポストの上を撫でると、同じようなジンクスだろうか。

そうしてハンドルを回し、カブセルは一つ出てきた、それをまじまじと玲子と千尋へと見せつけ、愛理はどこか得意げである。

だが二人ともきょとんとしてしまっていた、なぜならカブセルの中は何も見えないのだ、ただピンク一色になっているばかりで、それ以外に何かが入っているようにも見えない。

愛理はそんな一人にさらに見せ付けるかのように、カブセルを開くのだった、本来ならば人形だったりキーホルダーだったりが見えるものだが、そこにはなににもない。

その代りに、まるで消火器のようにすさまじい勢いで、ピンクの煙が噴出するのであった、玲子も千尋も慌てふためく暇もなく、煙に包まれてしまう。

やがてそのまま、意識は遠のいてしまった。

「はいはいお二人さん、今日はまあまあ楽しかったよ」

愛理の言葉と遠くに行く足音だけは、ただぼんやりと記憶に残った。

「うーん、私……」

薄暗いどこかで、玲子は目を見ましたものの、体はまるでびくりとも動かない、金縛りにあってしまっているかのようなのである。

「ひろちゃん、どこなの？」

暗い中で必死に声を出す、千尋の姿は一切見えなかった。

困り果ててしまった矢先、急激に周囲はゆれ、玲子は足元に吸い込まれていくかのように、急速に落下してしまう。

「きゃあーっ」

そのまま玲子は落ちていき、ようやく明るい場所へと出ることが出来た。

だが目に入っただのは、恐ろしいほどに大きな巨人の顔であった、あまりの出来事に悲鳴を上げようとするが、玲子は声は一切出ないでいる。

「こんなのあったっけ？」

「うーん、わかんない」

それは巨人でもなんでもなく、ただの○○二人であった、だがそれを巨人と感じてしまったのは、玲子自身が非常に小さくなったってしまったことに原因がある。

玲子は小さくなってしまったようだ、それも一切の身動きも出来ず、おまけに何か頭に違和感がある気がする、不思議な感覚だ。

「うわ、これダブった？」

○○の片方が嫌そうな顔をして、カプセルから取り出した物のキーチェーンを掴み、ぶらぶらと垂らしている、その姿に玲子はおどろくばかり。

「ひろちゃんなの……」

それは千尋であった、小さくかわいらしく、作り物のようになってしまっているもの、それはまぎれもなく千尋であったのだ。

かわいらしい頭には人間にないものが突き刺さっている、キーチェーンであった、それはきつと玲子にもあるのだろう、違和感の正体はそれのようだ。

「まあまあ、ダブりはダブりでいいこともあるぞ」

○○は二つを見せ合いながらも楽しげである、だが玲子は内心穏やかではない。

「ひろちゃん、ひろちゃんってばー ママだよー」

何度も呼びかけるが、千尋からは一切の返事がない、そもそも玲子の声は誰にも聞こえていないのだ。

「ほら、おそろいのキーホルダーってことで、友情が深まっている感じがするでしょ？」

「じゃあ、2000円よこさないよ」

わいわい盛り上がる○○二人と、母娘の仲が引き裂かれる二つ、それは対照的であった。

お互い別々の誰かのキーホルダーとして、今後は別々の運命をたどるだろう、そんな過酷な状態でも、キーホルダーとなった二人の表情は、一切変わらなかった。

「ママ……」



② 100円を回しましょうか

200円がないなら100円を回せばいい、話は至極単純なことである。

「ママ、あつちのがやりたい」

「また今度ね、ひろちゃん」

ぶーぶー文句を言う千尋をなんとかだめ、玲子は100円のカチャポンをやらせてあげた。

当初は文句ばかりであったが、千尋が入手したのはイチゴの付いたヘアゴムであり、途端にうきうきとし始める。

こんなのに100円の価値があるとは思えないが、千尋が上機嫌なので玲子はほっとした。

だが愛理はどこか不機嫌であった、じやらじやら音がなるほどに小銭があるなら、好きなだけガチャポンをすればいいのに、一切する事なく、そのまま財布を仕舞っている。

相変わらず変な子だなど思いつつも、玲子は千尋の手を引いて、もう一度おもちゃコーナーへと向かうことにした。

千尋が欲しかった人形の話は覚えていたが、万が一それが手に入らなかった時のために、第二希望以降を探ろうという魂胆なのだろう。

その後を静かに愛理が追っていく、玲子はまたしても笑顔を見せる愛理に、ぞっとしてしまった。

先ほどとは別の方面から来たので、人形の売っているところまではちょっと歩かなければならない。適当なところで曲がって進むと、どうやら男の子向けのおもちゃのところにでてしまったようだ。

怪獣、ロボット、正義のヒーロー、どれもこれも玲子にも千尋にも縁がないものばかり。

もしも男の子がいたら、どれが何なのか分かるだろうけれど、一切のものが分からない。

それを横目でちらちら見ていると、今度はフィギニアのコーナーに出てしまった。

同じ女の子の人形だというのに、女の子が遊ぶのに使う人形とは、あきらかに完成度が違う、やりすぎなほどに。

かわいいのには分かるが、どれも玲子や千尋に向けて作られたものではない、ちらちら見ながらも、それ以上のことにはしなかった、興味がなかった。

「そうだ、これにしようかな」

そんな中で、声をあげたのは愛理であった、なんだか先ほどとは違った機嫌のよさで、フィギニアの箱をいくつも触って楽しんでいる。

「愛理ちゃん、いたずらしちゃ駄目だよ」

いくら自分の子ではなくても、このまま注意しないのは世間的にもこの子にもよくないと判断したので、玲子は愛理へと話しかけた。

だが愛理は、何かを二つ抱えて玲子のほうへとやってくる、それは売り物のフィギニアであった、透明の箱に入れられた、かわいらしい姿が丸見えのフィギニアだ。

「ママさん、ほら」

急に手渡されたものだから困ったものだが、今度は思わずよっとしてしまう。

なぜなら、箱の中に入っているフィギニアが、あまりにも自分そっくりだからだ、もう一つのほうは千尋にそっくり、というよりも完全に千尋をそっくりそのままフィギニアにしたかのような、それくらいに精巧に良くできていた。

「なんで、私たちが……」

玲子が困る中で、愛理は玲子に指を向け、まるでトンボでも捕るかのように顔の前で指をぐるぐると回し出した。

その滴を巻く動きに、玲子の意識は薄れ出し、愛理の言葉に疑いなく耳を傾けてしまう。

「ママさん、じやなかったレイちゃんね、実はフィギニアなんだよ」

「私が、フィギニア……」

「そう、ここに売っているのと同じなの、あなたはそこのショーケースの中から、お外の世界に出ちゃったのよ」

「そ、そうだったんだ……」

がら空きのショーケースを見て、玲子は衝撃を受けてしまう、そこにはあるはずのフィギニアはなく、代わりに商品名と値段だけが空しく置いてあるだけであった。

「アクションフィギニアのレイ、それがレイちゃんなんだよ」

「でも、なんでこんなことに……」

「レイちゃんね、お外の世界に興味を持ちちゃったんだ、だからお外に飛び出して、自分人間だって嘘をついてたの、レイちゃんは嘘つきのフィギニアなんだよ」

「私が、嘘つき……」

「ほら、そこのひろちゃんも、レイちゃんと同じフィギニアなんだよ、レイちゃんが怪しまれな

いようになって、母と娘のふりをすることで、連れ出したの」

「そ、そうだったの……」

「その証拠にほら、アクションフィギニアのヒロ、ちゃんがあるじゃない」

ショーケースには同じく商品名と値段があった、そしてその下の棚にはいくつも商品が置かれている。どれもこれも玲子と千尋をそっくりそのままに結めて、フィギニアにアレンジしたかのようなものだ。

それらを見て、玲子はそのとしやがみこんで、千尋へと話しかける。

「ひろちゃん、ママね、今まで嘘をついてたんだ……」

「ママ……？」

「ママはね、実はフィギニアだったの、ひろちゃんもそうなのよ、私たちはフィギニアだったの」「えっ……」

「あそこでもいつもじっとしてるのが嫌になってね、お外の世界に飛び出しちゃったの、親子のふりをして……」

「じゃあ、ひろちゃんとママって……」

「ええ、親子でも人間でもなかったの、私たち嘘つきの悪いフィギニアだったの」

「わるい、フィギニア？」

「だからそろそろ、ショーケースの中に帰りましょう、私たちのあるべきところだ」

「う、うん……」

玲子は千尋の手を引くと、愛理の前でいろいろ考えたつても、ポーズをし始めた。

フィギニアとしてしつくりくるポーズを模索しているのだらう、アクションフィギニアらしいダイナミックさを演出したいようだ。

だが生身なので、そんなフィギニアらしくがっちり決まるはずもない、それは千尋もそうであった、結局お互いに、かわいらしくポーズを決めることに。

「ありがとうね、愛理ちゃん……、あなたのおかげで、私たち嘘つきじゃなくなって、元のフィギニアに戻るわ」

「いえいえ、お二人とも、じゃなかったお二人とも、お幸せに……」

「ママ、このポーズ恥ずかしいよ……」

「ひろちゃん、じゃなかったヒロ、私たちは親子じゃないのよ、これからはレイって呼んでよね、前みたいに」

「う、うん……、レイ……、フィギニアにも戻ってもよろしくね」

「ええ、私たちは同じ日に発売されたんだもの、これからはずっと一緒よ」

玲子と千尋はそのポーズのまま喋ることも動くこともなくなる。光ながらみるみると縮んでいった。

お互いに小さくかわいらしい大きさになったところで、どちらも縮むのが止まって光も消え、フィギニアへと変わっていた。

どちらも玲子と千尋にそっくりながらに、髪色から瞳の色までまるで違う、まるでアニメの世界から飛び出してきたかのような、特別なカラーであった。

「レイちゃんにヒロちゃん、どっちもかわいいね」

愛理は二つを持ち、ポーズを崩さないように注意をしながらも、ショーケースの中へと納めてしまった。

そして、二つの出来栄を確認した後に、フィギュア売り場を後にした。
離れ行く中で、店員が何人が話しているのを目にし、そちらの会話を耳を傾けてみる。



「なあ、あんな商品あったか？」
「いや、でも納品書にはちゃんと…」
「今日発売だって？　こんなの知らないなあ」
「まあまあ、アニメとか漫画はいつはありますから、我々が知らないだけで大人気なのかもしれませんよ」

「それにしてもよく出来てるな、そしてかわいらしい」

「ですね、まるで姉妹のようです」

「いやあ、親子じゃないの？」

会話にくすくす笑い、愛理は帰っていった。

今日の楽しい思い出を、何度も思い返しながら。

終わり